医業経営の現場から

file081　中国・四国地区

外科医から総合診療医に転身 地域の医療介護を守り発展させる

地域が求める家庭医へ

山口県の東南端に位置する周防大島で2004年、父の外科診療所を継承し、医療法人おかはら会おげんきクリニックを開設した岡原仁志理事長・院長。5歳の時に島で外科診療所を開業した父とともに移り住んだこの地に、小学校卒業以来となる帰島を果たした。

岡原院長は大学卒業後、同大で外科医として最先端のがん治療に従事する傍ら、がんワクチンの研究も続けていたが、思いも寄らない関連病院に転籍することに。介護保険の創設前夜で在宅医療の責任者を任されたこともあって、在宅医療に興味が移り在宅専門医としての開業を考え始めるようになった。

同時期、当初は兄が継ぐ予定だった島の父の診療所を、岡原院長が継ぐことが決まる。「しかし、島で求められていたのは家庭医（総合診療医）であることがわかりました。そこで父に4年の猶予をもらい、整形外科の医局に入り直したのです」。あらためて皮膚科、小児科、麻酔科、リハビリ科などで研修を重ね、満を持して周防大島に渡った。

最期を笑顔で迎える「おげんきハグニティ」

島で在宅医療を始めてみると、当初は年間3、4人あった看取りがパッタリとなくなった。退院して自宅に帰っても生活することが難しいためだった。「大島の高齢化は日本の20～30年先を行っているといわれていました。その頃すでに病気がちの高齢者には生活の場がない状況でした」と振り返る。

当時の大島は年間約500人が亡くなる中で1割が孤独死だった。そこで、廃校になった高校の校舎を利用して、高齢者に医療と介護そして生活の場を提供する「おげんきハグニティ」の建設に踏み切った。

この施設名にもある“ハグ”を取り入れているのが、岡島氏の診療の特徴だ。「きっかけは、米国の医師パッチ・アダムス氏との出会いでした。私も何度か入院した経験があり、医療をきっかけに人生が楽しくなるにはどうしたらいいか考えるようになりました。そしてあるとき、終末期の患者さんも笑いたいのではと気づいたのです。当時、アルフォンス・デーケン先生が死とユーモアの融合を説かれていて、私も死とユーモアを結びつける接着剤としてハグを取り入れ、人生の最期を楽しいものにしようと考えました」。そう話す岡原院長は患者に添い寝をする

医療法人おかはら会 おげんきクリニック 概要

■**所在地**　山口県大島郡周防大島町小松558

■**理事長・院長**　岡原　仁志

■**診療科**　消化器科、整形外科、外科、リハビリテーション科、皮膚科、泌尿器科、麻酔科

「日本の医療介護は評価が低すぎる。検査や薬ばかりでなく医療・介護の質に対する評価をしてほしい」と岡原院長。また、「地方の過疎化はどんどん進んでいる。地域を支える開業医同士の連携システム構築は急務」とも提言する

廃校となった高校の建物を改装整備した介護複合型施設おげんきハグニティ（クリニックから約1km）。サービス付高齢者向け住宅［22室］、グループホーム［9室］、小規模多機能型居宅介護［定員20名］、デイサービス、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、訪問介護事業所、託児所、食事提供サービス・サロンを併設し、「地域がハグむ（育む）大往生の島」を実践する。

理事長・院長　岡原　仁志 氏

1986年順天堂大学医学部卒業後、同大にて消化器・一般外科、1995年より在宅医療に取り組む。2003年に故郷の周防大島に戻り岡原医院副院長に、2004年医療法人おかはら会おげんきクリニックを開設、理事長・院長に就任。2012年複合型コミュニティ介護施設おげんきハグニティ開設。「患者中心の思いやり医療」は各種メディアで取り上げられる。著書に『奇跡が起きる「仁」の医療』（幻冬舎ルネッサンス）がある。

こともある。「添い寝は究極のハグです。私がすると、患者さんの家族もハグや添い寝をしてくれるようになります」。亡くなる人を看取るのは家族の仕事、最後の時間は家族に任せて、医師は何かあったら支援するのが仕事だというのが岡原流だ。

よき理解者の支援で地域包括ケアを先取り

ハグニティの設立も決して容易ではなかった。当初は2010年を起点に5年計画を立案。地元から廃校となる高校跡地を利用してくれないかとの申し出があり、計画は一気に進展するかに思えたが、当初予算をはるかに超える6億円というリフォーム費用がネックになった。借り入れを予定していた銀行は、プロジェクト規模が突然何倍にも膨らんだことから“成功の見込みなし”として撤退してしまう。すでに国土交通省からサ高住の認定を、内閣府から地域再生計画の認定を得ていたため、岡原院長は困り果てた。そこに融資を申し出てくれたのが、それまで取引がなかった銀行だった。

オープンの目処が立ち50人の新規職員を採用。島内外の住民が8割、2割は岡原流のケアコンセプトに共感した全国からの医療従事者が占めた。そうして2012年10月、おげんきハグニティは無事オープン。現在、職員は約70人に上るが、岡原院長の講演や著書に接し共感して応募してきた人たちが中心となって運営を支えている。医業経営コンサルタントも銀行との窓口となって経営や資金調達を支援している。地域の医療介護を支え、高齢者にも住みよい地域を残したいと考える多くの人たちの共感と協働によって、ハグニティの活動は支えられ、大島の地域包括ケアを形づくっていることがよくわかる。「課題は、夜勤を担う介護職などスタッフの労苦にどう応えていくか、そして後継の医師の確保」と岡原院長。人材不足に苦心し、診療報酬と介護報酬の低迷を打ち破るべく奔走する地方の声が届けばと切望する。

日々の取り組みを題材とした舞台「死に顔ピース」（2019年）やドキュメンタリー映画「結びの島」（2020年）も上演・公開

クリニック横で四つ葉のクローバーを植栽。栞やキーホルダーにして利用者に配布